

## 〔訂正〕

日本医史学雑誌，第53巻4号，627-634頁  
 日本医史学会平成19年6月例会，シンポジウム  
 「医史学と文学——吉村昭氏を追悼して」  
 岡田靖雄『一、「医史学と文学」論序説——司会  
 にあたって』

表記論文のうち、津村節子さんの発言要旨について誤りがあったので訂正したい旨、著者の岡田靖雄氏より申し出があった。また津村さんから記事を訂正し補足する手紙が送られてきた。634頁第2行以下の部分を「最後に吉村夫人津村節子さんのご挨拶があった。」と訂正するとともに、以下に津村さんからの訂正文を掲載する。

『日本医史学雑誌』，立派な雑誌を頂戴いたし有難うございました。私の挨拶が載るといことは全く存じませんで、従ってゲラもいただいておりません。ユーモアをまじえて話をいたしましたのが、要約したものを拝見すると私の話した要旨が伝えられていませんので、改めて訂正させていただきます。吉村は講演が得意で、面白くなくてはならない、とつねづね申しておりました。

酒井先生の御講演は吉村の作品について克明正確に系統立ててお話し下さり本当に有難うございました。その中で、吉村が徹底した資料調査をす

ること、原稿がとても早いことについてのエピソードを申し上げます。

薩英戦争に至る重要な「生麦事件」について、薩摩藩の行列に接触した英国人が斬られました。アラブ系の馬に乗ったイギリス人の肩先から斬り下げるなどということが可能だろうか、と吉村はすぐ鹿児島に飛び、野太刀自顕流という薩摩剣法の研究会の会長さんに実演していただきました。供頭の奈良原喜左衛門は六尺豊かな武士で、刀も長く巾も広いものだそうで、「長い刀を抜くと同時にリチャードソンの脇腹を深く斬り上げ、刀を返し爪先を立てて左肩から斬り下げた」というたった二行を書くために鹿児島を往復したのです。

原稿が早いというエピソードは「桜田門外ノ変」を書くにあたり、252枚も書いた原稿を焼却しました。尊皇攘夷に対する解釈がありきたりで、水戸藩領の海岸線が長いため外敵に対する危機感から生れた思想だと言い、書き直して新聞連載に間に合いました。吉村さんは原稿が早いと言われるので、作家の敵だといわれるほどでして、私自身もプレッシャーを感じていました。

編集委員会はこのような誤りがおかされたことを遺憾とするものである。

## 編集後記

本誌は今号から、判型をA5判からB5判へと大きくし、版組を横書きに改めた。本誌の歴史は明治13年の中外医事新報として始まり、昭和16年から日本医史学雑誌となり、128年間にわたる。これまで数多くの優れた論文を掲載し、我が国の医史学研究をリードしてきた。掲載された論文には、我が国の医史学に関するものが最も多いが、アジア、ヨーロッパを含め国際的な視点からのものも増えている。誌面を一新した本誌が、質量共に充実したものになり、医史学研究の発展にさらに寄与することを願うものである。

本誌に投稿される論文は、和洋古今の幅広いテーマを扱う。縦書きを必要とする論文もあり、引用する文献は和漢の典籍から最新の欧文医学論文まで多彩である。扱う資料の性質上縦書きが必要となる論文もあるであろう。内容・表現において多様な論文に柔軟に対応しながら、論文内容における一定の質および学会誌としての品格を確保することも必要である。そのための環境整備として、論文の長さや形式についても若干の基準を設けたり、論文内容の審査についても査読者と編集委員会の役割を明確にしたりといったことも重要な課題である。

判型と版組の変更に伴い、暫定的な投稿規定を編集委員会案としてすでに提示しているが、必要最低限の修正を行ったものである。投稿規定の改定案作成にあたっては、各方面からのご意見を伺いながら編集委員会において慎重に作業を行っている。理事会・評議員会の議を経て、総会にて提案させていただくので、今後の投稿にあたっては、新しい投稿規定にしたがっていただくようお願いする。

(坂井 建雄)